

もう一度いのちの歌を唄いたい〜「歌う尼さん」を離れて
デビュー10周年を機に生き方を自問し歩んでいきたい



シンガーソングライター、僧侶
やなせななさん

聞き手 高田英弦（医療記者）

奈良県高取町に江戸末期から続く、浄土真宗本願寺派の小さな寺がある。檀家はわずか30軒。代々「兼業寺院」として継がれてきた。この寺で生まれ育った現住職、やなせななさんは23歳で僧籍を取得。その傍ら在学中に始めた音楽活動を続け、2004年にシングル曲『帰ろう。』で全国デビューを果たした。しかし、CDは売れず、やがて子宮体がんに見舞われた。子宮卵巣全摘により一命を取り留めるも心身の後遺症に苦しんだ。08年から全国の寺院でコンサート&トークショーを展開。ファン層を広げてきた。やなせさんのこれまでの人生を尋ねた。

いじめに苦しんでいる間
大好きな歌が心の支えに

—どんな子どもでしたか。

やなせ 3人きょうだいの末っ子で、おとなしくおっとりした性格。運動が大の苦手で本を読んだりして過ごすのが好きでした。本堂でお経を読んだり寺の仕事を手伝ったりするのも嫌ではなかった。勉強好きで成績優秀な兄と姉が寺に全く関心を示さなかったのは対照的でした。

内気な上、小学校2年生まで体も小さかったので同級生からいじめの標的にされました。学校に行くと男子から殴られたり蹴られたり、女子からは暴言を浴びせられたり無視されたりし、

毎日が生き地獄のようでした。体育の授業中に何度もボールをぶつけられ、腕や足が赤くはれ上がったこともあり、加害児以外は見えて見ぬふり、教師は私に非があるとして取り合ってくれませんでした。

助けてくれたのは母でした。当時朝から晩まで仕事に追われ、家事・育児

PROFILE ●やなせ・なな●

1975年、奈良県の寺家に生まれる。幼少時より読経をそらんじ歌うことを愛してやまず、中学校では合唱部に所属。四天王寺高校を経て龍谷大学文学部に進学。学内外の軽音楽バンドに加わりボーカリストとして活動を始め、学卒後プロを目指した。2004年6月、シングル『帰ろう。』でデビュー。05年5月、アルバム『あいのうた』発売。08年3月から仏教系寺院でのコンサート&トーク活動を展開。13年9月に同活動の依頼受付を休止し、新たな活動を模索する日々を送っている。

は祖母にほとんど任せていたのですが、私がいじめに遭っているとの情報を耳にするや学校に乗り込み、いじめていた子どもを怒鳴り付けてくれたのです。私は仕返しされるに違いないと身構えました。ところが母の真剣な怒りは幼き加害児らを圧倒し、その日以来私へのいじめ行為はなくなりました。

—友達はできましたか。

やなせ 少しずつ増えましたが、心を許せる友達はいませんでした。3年生になって体がぐんと大きくなり精神的な強さも増したのですが、人間不信は解消されなかった。なるべく集団に交わらず、独り谷川俊太郎さんらの現代詩を読むのを楽しんでいました。

一方で歌が大好きで、いじめられているところも好きな曲を聴いたり歌ったりして救われました。中島みゆきさんや小田和正さんの作品、特に音の数が少ない楽曲に引かれました。テレビ局主催の「ちびっ子歌合戦」の予選に出たこともあります。

中2で能楽の世界を知り 高校から能の稽古に没頭

—中学・高校時代はいかがでしたか。

やなせ 中学校進学に際し、母の職場

鑑賞教室で深く感動し、能楽の世界に魅せられたからです。

高校に入ってからは一筋。学校の部活動には加わらず師匠宅と大阪能楽養成会に通い詰め、能楽師になることを目指して稽古に没頭しました。その



僧衣姿で手を合わせるやなせさん

©やなせなな

に近く、姉の通学にも便利な奈良市に、一時的に転居しました。小学校は1学年2クラス70人前後であったのに対し、進学先は1学年9クラス400人規模。人数が多い分だけ、生徒一人一人の個性もさまざまで、その環境はすごく居心地が良く、おのずと素の自

半面、学業に全く身が入らず授業について行けず休学・留年。従来在籍していた「進学コース」からスポーツ選手らが属する「特技コース」に転じ、同期より1年遅れて卒業しました。

—高校で能の稽古に夢中になったのはなぜでしょう。

やなせ 能の魅力は簡素でありながら無限の奥行きが感じられるところ。舞台・照明が一定だからこそ能面と能装束、舞がいつそう引き立つ。無駄のない所作の美しさ、日本人の世界観・死生観・恋愛観が随所に見いだせる。能が題材とする平家物語や源氏物語といった古典をもひもとくようになり、諸行無常という仏教思想、戦に敗れて死んでいく武士の哀れ、恋する女の激しく切ない思いにわくわくしながら、能の世界にはまっていたのです。

分で級友に接することができました。

合唱部に所属し、すぐに皆と打ち解けて仲良くなりました。毎年声変わりし3年間でソプラノ、メゾソプラノ、アルトの全パートを経験しました。また2年時から趣味で能を習いに行くようになりました。校内で開かれた狂言

大学では音楽活動に専念 僧籍を得るも自覚は持てず

—大学でも能を続けたのですか。

やなせ はい。でも2年生の終わりにやめました。7年余りにわたり稽古に励んできましたが、本気でプロになりたいとは思っていないと自覚したからです。では自分は何をやりたいたのか。能と同じくらい好きなことに目を向けました。

それは音楽でした。歌うのも大好きというところで入学直後から軽音楽部に属し、ボーカル担当を希望して仲間を探しました。しかし部員の多くは何らかの音楽活動の経験を有し、次々と同志を見つけてバンドを結成。経験もなく歌唱力も乏しかった私は気後れし、取り残されてしまいました。

音楽をやりたい——。私は軽音楽部から離れて学外のライブハウスなどに

出入りし、社会人らのバンド活動に加えてもらいました。先輩たちから洋楽の世界を案内され、水を得た魚のようにブルースやジャズ、ソウル、R&B、ロックの名曲を聴き込んで歌う練習を重ね、ライブで披露することを繰り返しました。日本人ミュージシャンの中では矢野顕子さん、大貫妙子さんの音楽に憧れていました。

一方、在学中に僧籍を取得されたのですね。

やなせ 学業そつちのけで身も心も音楽に奪われていましたが、4年生になり祖母から「そろそろ得度を受けたら」と打診されました。僧職に就いてがんばろうという気持ちはなかったのですが、生家が寺で祖母の気持ちも分かっていたこともあり、夏休みに11日間の得度習礼を経て僧籍をいただきました。浄土真宗の僧侶は出家せず家庭生活を続けながら勤

やなせさんの作品「春の雪」の歌詞

※東日本大震災で犠牲となった人たちの追悼曲。

春の雪

作詞・作曲・編曲 やなせなな

今にも君がその扉を開けて
「ただいま」って笑顔で帰って来るような気がして
見つめる先に広がるふるさとの海
あの日と同じように降る春の雪

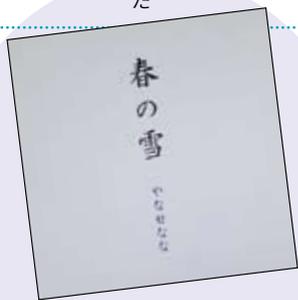
いつもと変わらずテーブルをはさんで
何を食べていたのかさえもう忘れてしまった
つけっぱなしのテレビから流れていたのは
底抜けに明るいコメディアン笑い声

ずっとずっとそんないとおいしい日々が
当たり前のように続くと思ってた

最後になるってわかっていたなら
話したいことたくさんたくさんあったのに
見つめる先にもう君はいない
あの日とおなじように春が訪れても

流されて消えた街の中にたたずみ
どこを歩いて来たのかさえもうわからなくなった
やっと見つけた君の生きていた証に
涙は流れなかった 信じたくもなかった

そつとそつと手を合わせ見送つても
さよならなんて言えない
言えないよ



DDCZ-1850 2013年2月20日発売
アルバム「春の曲」には表題曲を含め、復興への願いを込めた7曲が収録されている。

●やなせななホームページ
<http://www.yanasenana.net/>

今でも君に想いは届くかな
ことばをからだをすべてを失つても
見つめてわたしをどんなに遠く離れても
ここでひとり生きているから
今君がわたしの心に
「ただいま」って笑顔で帰って来る
見つめる先に眠るいくつものいのち
おかえりとこたえるように降る春の雪
おかえりとこたえるように降る春の雪

行するとはいえ、当時の私は僧侶としての自覚が全くない不届き者。まさしく「名ばかり僧侶」でした。

浮草を経て目指したのはシンガーソングライター

—能をやめて音楽に打ち込み、僧侶の資格を取られ、卒業後どう過ごされた

のですか。

やなせ 所定単位を取得できず留年し半年遅れで大学を出たのですが、進路について深く考えることはありませんでした。音楽に夢中。とにかく歌っていたら幸せ。アルバイトをしながら音楽活動を続け、浮草のように日々を過

ごすようになったのです。

そうして2年ほど経過したある日、バンド仲間からオリジナル曲の創作を持ち掛けられました。作詞・作曲経験ゼロでしたが、早速幾つかの習作を試みました。しかしなかなか良いものができず、周囲の評価もいまひとつ。作った本人も好きになれないような歌ばかりでした。

創作を続ける中、最初の作品と呼べるようなものができました。タイトルは『祈り—you will be waiting』。愛猫の死を見届けて作った曲です。これができる以後の創作活動に弾みがつきました。

さらに後年シンガーソングライターとして活動する原点、きっかけとなる『誓い』という曲を作りました。これは若くして姉を亡くした友人の悲しみに寄り添いたい、彼女のために歌いたい、その一心で書き上げたもの。単に自分が楽しいから歌っていた私が初めて誰かのために歌いたいと思ひ、自分





歌を披露しトークを繰り広げるやなせさん ©やなせな

の言葉と旋律から成る楽曲を多くの人に届けたいと願うようになった――。26歳を過ぎた冬のことでした。

――ようやく迷いが消えてマイウエイが見えてきましたか。

やなせ 歩いていきたい道は見えてき

た。幸いにも発見が早く手術は的確であったため回復は早く、手術10日後に退院できましたが、心身に大きなダメージを負いました。術後ホルモン療法に伴う手指・足の関節障害、子宮卵巣全摘によって生じた更年期障害、骨粗しょう症。一番つらかったのは性別を奪われ、自分自身を否定されたような感覚にさいなまれ、術後2年近く感情をコントロールするのが難しかったことです。

さらに自宅療養中に突如、所属事務所が事実上閉鎖。絶望し、立ち上がる気力は底をついたかと思われました。しかし不思議なことに時間が経過し、家族や友人、医師らに見守られ、かつての音楽仲間と交わるうち、再び楽曲を作り歌いたいという意欲が湧き上がってきました。大学時代の同級生からの講演依頼をきっかけに、08（平成20）年春から全国の寺院でコンサート&トークショーを始めました。

たものの、すぐには前に進めない現実の壁にぶつかりました。全身全霊を込めてデモテープを作り、履歴書を添えてレコード会社などに送り続けました

が、せいぜいオーディション止まり。それでも諦めず、優に1000回を超えるアプローチを繰り返しました。その結果、ある音楽事務所から声が掛かり、

――どんな内容のコンサート・講演ですか。

やなせ 各寺院の要望によって異なりますが、1ステージは平均60〜90分。がん体験や命の尊さ、平和などをテーマにすることが多いです。歌の後に話をして、話の後は再び歌……と交互に繰り返します。

女性特有のがんに関しては、特に若年者の多くは婦人科受診をためらいがちですから、早期受診の重要性を訴えています。保健師らによるがん検診の受診啓発、精神面での患者サポートも欠かせないと確信しています。

――毎回盛況と伺っていますが、お寺コンサートの新たな依頼は受け付けていないそうですね。

やなせ 大変ありがたいことですが、ここ数年は年間200回以上、忙しいときは月27回も公演を行ってきたもの

プロデューサーによる細やかな指導によって歌詞をブラッシュアップし、メジャーシーンで活躍するミュージシャンの手による編曲を経て、レコーディングに臨みました。

半年後の2004（平成16）年6月、シングルCD『帰ろう。』をリリース。全国デビューにこぎ着け、うれしさのあまり小躍りしました。ところがプロモーションに力を入れてもCDの売り上げは伸びず、注目度も上がりませんでした。さらに、自分でも気付かないところで、真の正念場が迫っていたのです。

がん・所属先閉鎖を克服 創作再開し全国公演展開

――折しも子宮体がんに襲われたのですね。どのような心境でしたか。

やなせ シンガーソングライターとして活動が行き詰まっていた中で、大病発覚でしたから、すぐく落ち込みまし

です。一旦は自分を落ち着かせた上で、もう一度進むべき道を問い直すための時間を作る必要があると考えました。一人の僧侶として先祖から受け継いだお寺を守りたいという気持ちは強く抱いています。だからといって不特定多数の人々を対象としたコンサートという場で仏法を説くことが、私の仕事だとは思えません。40歳を前に「歌う尼さん」を離れて、命の歌を作り歌うというシンプルな活動に正面から取り組みたいという気持ち。今はつきりと芽生えています。

BOOK



『歌う。尼さん』
やなせな著
四六判176ページ/遊タイム出版